

カンリウ工業株式会社

■平成24年度テーマ

新たな米粉製粉技術の開発による小型製粉機の事業化

■平成24年度概要

食生活の変化等により「ご飯」離れが進み、お米の消費量は年々減少している。現在約9割を輸入で占める小麦の1割でも「米粉」に代替できると約50万トンの需要が見込め、食糧自給率の向上が期待できる。しかし米粉の製粉はプラント化された高価な製品が主流で米粉の需要が拡大していない。そこで個人農家（消費者）向けに高度な切削技術を有する硬質材加工会社の協力を得て新しい製粉技術を開発し低コスト（約1/5）、省スペース（約1/3）の米粉製粉機を開発、早期事業化に繋げ市場獲得を目指し米粉の需要拡大に貢献する。

■平成24年度分類

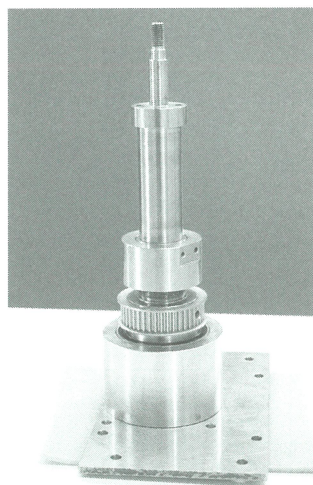
＜事業類型＞ 試作開発＋設備投資

＜競争力強化の形態＞ ニッチ分野特化型

＜22分野技術＞ 切削加工

■事業の概要と成果

新たな米粉製粉技術の開発による小型製粉機の量産試作機を開発した。今回開発した新しい製粉技術を先ずはモニター機として市場投入。高精度なNC旋盤導入により切削加工技術高度化を進め、より低コストで省スペースな製品を早期事業化に繋げ市場獲得を目指し米粉の需要拡大に貢献する体制が整った。



好機逸すべからず

「ものづくり補助金」採択企業を訪ねて

カンリウ工業株式会社（塩尻市）

小型精米機市場で全国約30%のシェア。
独創的な技術とアイデアできらりと光る企業へ。

「カンリウ」の社名は特許技術から

プロ農家やお米屋さん向けの小型精米機市場で全国約30%のシェアを持つ、カンリウ工業。その歴史は1925年、松本市出身の創業者が大阪で「大阪精米機製作所」を創業したことから始まります。終戦間際に松本市に疎開。61年現在地に移転したのを機に社名を「カンリウ工業」と変え、現在に至ります。



「大阪精米機製作所」時代の環流式精米機

「カンリウ」の由来を藤森秀一社長に聞くと明快な答えが返ってきました。

「カンリウとは、当社の特許技術である“環流式”からきています。精米機の中で米を循環させ、米同士の摩擦によって表面の糠を取り除いて白米に仕上げる技術です」

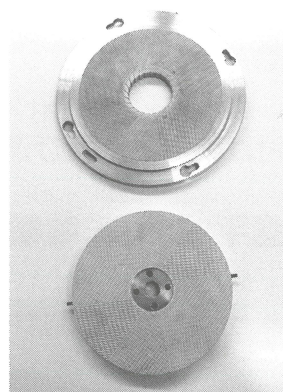
環流式のメリットは、米に無理をかけずに精米するため、おいしい米に仕上がること。ただ処理が丁寧な分、精米時間がかかるのが難点です。それに対し、処理スピードが速く利便性にすぐれた「一回通し型」が登場し、現在はこちらが精米機の主流。性能向上により米の仕上がりも変わりません。「しかし循環型（環流式）は、こだわりを持つプロの農家やお米屋さんに根強く支持され、これからもなくなることはありません」。

ニッチな商品づくりで存在感を示す

同社は各種精米機と白米計量機などの周辺機器を主力に、売上げの約25%を占める肥料散布機などの製品開発を手がける一方、ニッチな商品の開発にも力を入れています。

その一つが、そば、米、煎り大豆などの製粉が簡単にできる製粉機。ものづくり補助金を活用してNC旋盤を導入し、臼部分を限りなく石臼に近い形状に仕上げる技術開発に取り組みました。「石

臼で挽くと最も上質な粉ができる。しかし石臼を使うのはコスト的に無理。金属に石臼の特殊な切り込み形状を再現するためには、どうしてもNC旋盤が必要でした」と滝澤十一郎常務は明かします。



石臼の切り込み形状を金属に再現した臼

製品はコンパクトで価格を抑え、個人の利用にも対応。同社では米の有効活用を視野に、米粉が簡単にできる製品としてもアピールしていきたい考えです。

「今、農家が変わってきています。集落営農や農業法人が増える中で、今後はそういう新しい農家向けの業務用製品、しかも精米機単体ではなく、パッケージなど周辺作業まで含めたシステムの開発をメインに取り組んでいきたい。もちろん当社の市場に合った、コンパクトなシステムに限られますが」



ものづくり補助金で導入したNC旋盤

同社では独創的な技術とアイデアを活かし、ニッチな分野できらりと光る企業をめざしているようです。



カンリウ工業株式会社

代表者 代表取締役 藤森秀一
創業 1925（大正14）年4月
資本金 9,000万円 従業員数 41人
本社 塩尻市広丘野村1526-1
TEL.0263-52-1100 FAX.0263-54-2485
事業内容 農業機械の開発・製造

